

「THE PLAY since 1967 まだ見ぬ流れの彼方へ」展関連イベント

シンポジウム「芸術の(再)歴史化：作品と資料体のあいだで」

10月29日[土]13:00ー /会場：国立国際美術館地下1階講堂

登壇者

上崎千(うえさき・せん) | 芸術学／アーカイヴ理論

プロフィール：

1974年、神奈川県生まれ。芸術作品の在り方(芸術の「作品」としての在り方)の転換期＝ポストモダニズム期に生じた、諸芸術の非ミュージアム的な在り方、非展示的な在り方、出来事そのものを媒材として用いるがゆえのアーカイヴ的な在り方(芸術家の表現が必ずしも「作品」として結実せず、システムとしての言語と物理的な資料体との間の曖昧な層に留まること)に関心がある。東京芸術大学・横浜国立大学非常勤講師。

発表要旨：

ある芸術が回顧され、ドキュメント群の残存に注目が集まり、それらがミュージアムに配置される時、展示会場は典型的なコンセプチュアル・アートの様相を呈します。芸術から俄かに分化したキュレーションという営みのそのような(再)前景化、脱分化を、ポストミニマリズム期に必然的に生じた「芸術の展示的な在り方」「インスタレーション」の偏重傾向がもたらしたものと看做し、批判的に考察します。ときに非芸術の外観を弄びつつ芸術作品を非陳列的に示すこと(誇示すること display)や、非芸術とされる品々をオーソックスに陳列する芸術が、どちらもある種のビューロクラシーとして洗練されていった経緯について。キュレーションをあくまでコンセプチュアル・アートというプログラムの中心的な目論みとして捉え直す試み(アーティストのパロディとしてのキュレーター／キュレーターのパロディとしてのアーティストについて)。

「THE PLAY since 1967 まだ見ぬ流れの彼方へ」展関連イベント

シンポジウム「芸術の(再)歴史化：作品と資料体のあいだで」

10月29日[土]13:00ー /会場：国立国際美術館地下1階講堂

登壇者

田中龍也(たなか・たつや) | 群馬県立近代美術館学芸員

プロフィール：

1971年生まれ。東京大学文学部美術史学科卒業後、98年より現職。主な企画展に「田中功起 買物袋、ビール、鳩にキャビアほか」(2004年)、「群馬の美術 1941-2009」(2009年)、「館林ジャンクションー中央関東の現代美術」(2012年、群馬県立館林美術館)、「1974年ー戦後日本美術の転換点」(2014年)、「群馬 NOMO グループの全貌」(2016年)がある。

発表要旨：

「群馬 NOMO グループ」は、1963年から69年にかけて前橋を拠点に活動した前衛美術家集団である。交通標識の形式を借りて屋外に展示する「標識絵画」、商店街のシャッターに公開で絵を描く「シャッター絵画」など、集団制作による匿名性を特徴とする彼らの活動は、前衛美術を日常生活に融合させ、社会活動と協働させようとする試みであった。

今年開催された「群馬 NOMO グループの全貌」展(群馬県立近代美術館)は、先行する研究をふまえてさらに調査を進め、作品を可能な限り集めることでその活動の全体像を明らかにすることを意図したものである。しかし活動を牽引した中心メンバーは既に他界し新出資料は少なく、また作品についても、彼らはハプニングの要素を取り入れながらも実体のある作品を発表してきたはずだが、残された作品は非常に限られていた。

今回は「群馬 NOMO グループ」の紹介も含め、この展覧会の成果と課題について報告する。

「THE PLAY since 1967 まだ見ぬ流れの彼方へ」展関連イベント

シンポジウム「芸術の(再)歴史化：作品と資料体のあいだで」

10月29日[土]13:00ー /会場：国立国際美術館地下1階講堂

登壇者

富井玲子(とみい・れいこ) | 美術史家／「ポンジャ現懇」主宰

プロフィール：

ニューヨーク在住。「ポンジャ現懇」主宰。大阪大学で修士課程を終了後、テキサス大学オースティン校で博士号取得。『グローバル・コンセプチュアリズム』(クイーンズ美術館)、『センチュリー・シティー』(テート・モダン)など共同企画。英文単著に『荒野のラジカリズム：国際的同時性と60年代日本の美術』(MIT 大学出版、2016年)。

発表要旨：

松澤宥の郵送大作戦

——慶応大学アートセンター所蔵瀧口修造文書を中心に

松澤宥は、1964年6月1日の啓示を契機に〈物質消滅〉に覚醒、〈観念美術〉を提唱し、〈反文明〉の思想を掲げるにいたった。その表現は、テキストを紙に活字印刷、または手書きを青焼きやコピーで複写するという手法が主だった。そのため、一般的な意味での〈作品性〉が希薄で〈資料〉との境界が見えにくい、という一面がある。

作家本人は、1969年東京の青木画廊個展、1971年アムステルダムのArt&Project 個展に際して各40点、71点からなる、自己アーカイブ化ともいえる作品セットをまとめており、松澤研究の基準作品となっている。他方、慶応大学アートセンター所蔵瀧口修造文書にふくまれる松澤作品は主に瀧口への郵されており、ある意味で作品の〈生きた〉形を偲ぶこともできる。

この発表では、集団によるメールアートのアーカイブを作品化した《精神生理学研究所》への出品作品も交えて〈郵送〉の視座から松澤作品の歴史化を考えてみたい

「THE PLAY since 1967 まだ見ぬ流れの彼方へ」展関連イベント

シンポジウム「芸術の(再)歴史化：作品と資料体のあいだで」

10月29日[土]13:00ー /会場：国立国際美術館地下1階講堂

登壇者

平井章一(ひらい・しょういち) | 京都国立近代美術館

プロフィール：

1962年京都府生まれ。関西大学大学院文学研究科修了。博士(文学)。兵庫県立近代美術館、同県立美術館、国立新美術館を経て2012年から現職。「関西の美術 1950's~1970's」(兵庫県立近代美術館、1994年)、「結成 50周年記念『具体』回顧展」(兵庫県立美術館、2004年)、「グループ〈位〉」(兵庫県立美術館、2005年)、「『具体』—ニッポンの前衛 18年の軌跡」(国立新美術館、2012年)などを企画。

発表要旨：

美術館学芸員として30年近く20世紀以降の新しい美術の動向と関わってきた。特に「具体」をはじめとする関西の動向について、それらを調査し、作品や資料を収集することこそ、公立美術館に勤める学芸員の義務であるとの思いで取り組んできた。その背景には、私が美術史の世界に足を踏み入れたころ盛んになった一極主義的な近代史観を再構築する思潮の影響や、いわゆる「地方」で生まれ育った人間として、日本の20世紀美術史が東京を中心に編まれ、その他の動向が歴史から消し去られていくことへの危機感があった。そして今、調査や研究が、大きな転換点、新しいフェーズに入っていることを強く感じる。1950年代、60年代に活動の中心にいた作家たち、関係者が亡くなり始め、その結果、研究は残されたもの(作品、資料)を駆使した解釈論になり、研究の主体に大学が参加し、資料アーカイブの構築が叫ばれている。アメリカを中心に海外の研究機関から日本の20世紀後半の資料に注目が集まってもいる。こうした状況は、新しい可能性や期待とともに危うさもはらんでいる。「現場」を歩いてきた立場と目で、この両面について若干の考えを述べたい。